

2025年4月13日 棕櫚の主日礼拝(受難節第6主日礼拝)メッセージ

「救いとは何か」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 27章 32-56節

3月から始まった今年の「レント」、受難節もいよいよ最後の一週間となりました。最後の一週間は「受難週」と呼ばれ、今日はイエス様がエルサレムに入城した際に、民衆が自分の上着や、棕櫚、ナツメヤシなどの木の枝を道に敷いて歓迎した(ヨハネ 12:13 並行)ことに由来して、「枝の主日」や「棕櫚の主日」と呼ばれています。そして、今度の木曜日は、いわゆる「最後の晩餐」の席で、イエス様が弟子たちの足を洗った「洗足木曜日」となり、翌日の金曜日が十字架にかけられた受難日、そしてそこから3日目となる次の日曜日が、キリストの復活をお祝いする「イースター」となります。

先程、私たちはイエス様が十字架にかけられ、罵られ、そして息を引き取るまでの場面を読みました。最高法院で裁かれ、ローマから派遣されていた総督ピラトのもとに連れて行かれて、ローマ式の見せしめ刑である十字架刑の判決を受けたイエス様は、鞭打たれてから、兵士たちに引き渡されました。その後「ゴルゴタ」と呼ばれる処刑場までの道を、自分がかげられる十字架となる木の柱を担いで歩いて行きましたが、おそらく途中で動けなくなったのでしょう。そばに居合わせたキレネ人のシモンが代わりに担がされました。

そして、いよいよイエス様は十字架に架けられ、見張りの兵士たちからも、両隣に一緒に十字架にかけられた死刑囚からも、そして通りかかった人たちからも、罵られ、祭司長たち、律法学者たち、長老たちも「イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう」と罵られました。そしてそのまま十字架上で何時間が過ぎたのでしょうか。午後の3時頃に、イエス様は大声で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか)と叫んで、息を引き取りました。51-52節にある「その時、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩盤が裂け、墓が開いて、眠りに就いていた多くの聖なる者たちの体が生き返った」という記述は、恐らく歴史的な事実というよりは、神話的・文学的な表現だと考えられます。もしも、実際に地面が割れて、岩盤が裂けるような大地震が起こっていたら、大惨事となっていましたし、蓋をしてい

るはずのお墓が開いて、死者たちが次々と生き返っていたら、それこそ摩訶不思議です。十字架上でイエス様が息を引き取ったことは、4つの福音書全てに記されていますが、この死者たちの生き返りは「マタイによる福音書」のみですし、イエス様の死が、普通の人々の死とは異なる、特別だったということを伝えたい人々の気持ちが、口から口へと伝わっていくうちに、背びれ尾びれとなって加わって行ったのかもしれない。

それにしても、このお話を読むと、何とも救いのないお話のように感じてしまいます。どうして、あれだけ人々に優しく接して来たイエス様が、正しい人が、権力者たちによって一方的に裁かれ、処刑されて行くのか。命の神に絶対の信頼を置き、目の前の人々に仕え、尽くしてきた正しい人の最期が「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」という言葉なのか。あまりにも希望がないではないか、と思ってしまう。

このイエス様の最期の言葉「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」は、「大声で叫ばれた」とありますが、今にも息を引き取る間際の方が、大声など出せるはずもなく、おそらく遠巻きに見守っていた女性たちの耳にも聞こえなかったのではないのでしょうか。十字架の下にいて、見張っていた兵士たちがそのアラム語・ヘブライ語の言葉を耳にして、「エリ、エリ」と言っていることから、預言者「エリヤを呼んでいる」と勘違いしたのかもしれない。しかし、この言葉は、詩編 22 編にある言葉です。「わが神、わが神／なぜ私をお見捨てになったのか。／私の悲嘆の言葉は救いから遠い」(22:2)。そして、神への嘆きから始まるこの詩編 22 編の後半以降は、神への賛美で終わっています。そのために、「十字架の上で息を引き取る間際のイエス様は、絶望の言葉を述べたのではなく、詩編 22 編全体を通して、神様への賛美を述べようとして力尽きた」と言う人もいますし、また「詩歌の冒頭、一部を代表して引用するだけでも、その詩歌の全体について言及しているのと同じだと、当時の人々の間では考えられていた」と言う人もいます。しかし、本当にそうでしょうか。

肉体的にも精神的にも極限までボロボロにされて、息も絶え絶えになっている所で、それでも「神様、感謝します。あなたを賛美します」と言える人など、一体何人いるのでしょうか。「イエス様は神様の子だから決して絶望なんてしなかった」と言うよりも、「あのイエス様も、私たちと同じように絶望することもあった」と言う方が、

私たちの隣にいてくれる存在として、より身近に感じられるのではないかと私は思いますが、如何でしょうか。

詩編 22 編には、「わが神、わが神／なぜ私をお見捨てになったのか」(2)という言葉の他にも、「<sup>7</sup> 私は虫けら。人とは言えない。／人のそしりの的、民の蔑みの的。<sup>8</sup> 私を見る者は皆、嘲り／唇を突き出し、頭を振る。<sup>9</sup>『主に任せて救ってもらいがよい。／主が助け出してくれるだろう。／主のお気に入りなのだから』と」(7-9)という言葉もあり、また「<sup>17</sup> 犬が私を取り囲み／悪をなす者の群れが獅子のように／私の両手両足を囲んでいる。～(彼らは)<sup>19</sup> 私の服を分け合い／衣をめぐってくじを引く」(17, 19)という言葉もあります。つまり、この福音書のお話を書いた記者は、新聞記者のように見聞きした事実を記録したのではなく、詩編 22 編の詩歌に合わせて、イエス様の最期の場面を表現したということです。それは意図的な剽窃や創作というのではなく、その方がイエス様の生き様が、忘れ去られてしまうことなく人々の心と記憶に刻み付けられるために、相応しかつたからだ、ということなのだと思います。

ところで、今回のお話の中で、不思議なのは、42 節の「他人は救ったのに、自分は救えない」という祭司長たちの言葉です。別にこの言葉が無くても、「神の子なら、自分を救ってみろ」だけでも、十分なはずです。にも拘らず、「他人は救ったのに」と言う。逆を言えば、イエス様を殺す程に敵対していたにも拘わらず、祭司長たちの目からしても、イエス様が多くの群衆たち、名も無き貧しく小さくされていた人々を確かに「救って」来ていたことは否定しようのない明らかなことだった、ということでしょうか。

「救い」とは何でしょうか。「今はこんなに苦しい生活でも、死んだ後には何の苦しみもない天国で安らかな生活ができますよ」ということでしょうか。だとしたら、この世界を生きている意味はどうになってしまうのでしょうか。イエス様は出会う人々、一人一人に天国へのパスポートをお守りとして渡したのでしょうか。そうではないはずですが、もしもそうならば、イエス様の最期の言葉が、嘘になります。

「救い」とは、自分ではどうしようもない状態から助け出されること。溺れている状態から、掬い上げられること。息が出来ない状態から安心して息が出来る状態に移されることです。「もうダメだ。絶望しかない」という一見「八方塞がり」にしか

思えないような状況において、小さな穴から射し込む一条の光を見出すことです。ガリラヤの地を生きて歩まれた歴史のイエス様は、圧政と重税、貧困と病気や障がい、偏見や差別によって苦しめられ、弱く小さくされていた人々に、それでも命の神が共にいること、絶望の中にはいつまでも捨て置かれていないことを、その言葉とふるまいを持って告げ知らされました。そして、それによって多くの人々が救われ、解放され、再び立ち上がらされました。そして、それはイエス様の反対者たちからしても、認めざるを得ない、明らかなことだったというわけです。

救いはどこにあるのか。希望はどこにあるのか。それらは決して絶望などの暗闇とは無関係の天国、あの世にあるのではなく、むしろ絶望の果てに、闇の中の絶望を通り抜けた所にあるのではないのでしょうか。イエス様は受難から逃れることも避けることもしなかったのは、自らの使命に生きるためでした。とはいえ、イエス様も全く平気だったわけではなく、悩み苦しみ(マタイ 26:37)、最期には絶望しました。それでも神はそのイエス様を、死の淵には捨て置かれず死から引き起こされました。イエス様が十字架への道を歩まれるこの受難週、最期まで悩み苦しまれたイエス様の人間らしさに、私たちもまた自分自身を重ねることが出来るのではないかと思います。私たちは今週もまたイエス様と共にあって、たとえ苦しい道であっても、真実に向き合う勇気をもって、一歩ずつ歩みを進めて参ります。